

清末・民国期における巡礼ガイドブックと杭州寺院

著者	石川 重雄
著者別名	ISHIKAWA Shigeo
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	53
ページ	67(172)-86(153)
発行年	2019-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010978/

清末・民国期における巡礼ガイドブックと杭州寺院

石川重雄

緒言

仏教や道教をふくめて、中国史における民間の巡礼にかかわる事象、すなわち朝山進香⁽¹⁾を考察する場合、こんにち残されている進香関連の書籍・冊子が重要な意味を持つ。官庁・役所の編纂したものでなく、民間で発刊されたものであれば、基層社会の研究においても、より一層重要性を増すことは言うを俟たない。

さて、進香に関わる民間の指南書(Pilgrimage guidebook)に焦点を絞ると、まず清代の光緒2年(1876)刊、釋顯承集・釋儀潤校『叅學知津』が挙げられる。本書は、杭州の僧侶らが編集・執筆したもので、華北から華南にかけての寺院・道観・聖蹟を含む巡礼地への路程を巻上29、巻下27、合計56ルートに分類して網羅し、朝山進香、すなわち巡礼のための訓戒や心構えなども記す。また民国初期には、上海東新橋を本店とする清香・蠟燭を扱う業者、源豊潤燭棧(杭州西湖の支店は、滄州旅館内に入所した香燭棧分発所)が杭州西湖の客香のために刊行した『武林進香録』・『武林進香須知』、同じく源豊潤燭棧が普陀山の香客のために発刊した『普陀進香録』⁽²⁾などがある。『武林進香録』と『武林進香須知』の二書は、民国初期の杭州西湖周辺地域における巡礼ガイドブックであることが判明する。そこには寺廟・宮観・名勝古跡が含まれ、宋代を萌芽として明清時代より組織的におこなわれた天竺進香も巡礼ルートに組み入れられている⁽³⁾。これらは現地に密着した巡礼の指南書として知られ、巡礼研究に不可欠なテキストといえる。

ここで中国における巡礼ガイドブックの全体像を整理したTimothy Brook氏の先駆的業績⁽⁴⁾について触れておきたい。Timothy Brook氏の著書で注目されるのは、巡礼ガイドブックを広範囲に、かつ鳥瞰的に捉え、路程書、商業書、百科全書、山志、寺廟宮観志などをその範疇として位置づけている点にある。すなわち冒頭のRoute Books-Bibliography(pp.11-27)に掲げられた大項目の分類を掲げてみるならば、以下の如くである。

1. National Courier Network (全国物流ネットワーク)
2. Provincial Courier Networks (地方物流ネットワーク)
3. Guides for Particular Routes (個別的路線のガイドブック)
4. Comprehensive Route Books (包括的路線のガイドブック)

このうち4. Comprehensive Route Booksの中の小項目、4.4. Pilgrim Route Books(巡礼ルートのガイドブック)に、本稿で取り上げる『叅學知津』が紹介されている。この『叅學知津』については、すでにReginald Joonston氏の著書『中国の仏教徒』に紹介および序文等の意識があることも説明されている⁽⁵⁾。Timothy Brook氏の研究を受けて、Susan Naquin(韓書瑞)とChün-Fang Yü(于君方)両氏の共編『中国の巡礼者と聖地』序文では、

Timothy Brookが学会で報告した論文に示したように、旅行は僧侶の宗教的修行において鍵となる要素となった。1827年に出版され

たガイドブック『叅學知津 (Knowing the Fords on the Way to Knowledge)』の著書は、早期に悟りを開くことを目的に名山を巡礼する僧侶にとって特別なガイドラインとなった。道中、僧侶は食べ物のために乞食(こつじき)をし、寺院に宿を求め、旅の苦難に耐え、常に寺院の規範に則って行動すること。他者との交わり、支援、保護のために他の僧侶と共に旅をするよう、しかし旅に時間の制限を設けないよう、忠告した。名声と利益への欲求を手放し、進むべき道に心を定める僧侶は道中を家と捉え、不安なく過ごすべきと助言した。

と、僧侶のための巡礼ガイドブックとして発刊された『叅學知津』に言及する⁽⁶⁾。

従来の研究では、中国における巡礼ガイドブックについての言及や報告はあったが、テキスト内容の詳細な分析はされていないようである(補記参照)。ここに杭州の寺院や僧侶との関わりから、叙上のテキスト『叅學知津』・『武林進香録』・『武林進香須知』の紹介と分析を試みたい。

一、『叅學知津』

日本の研究機関に所蔵される清・光緒2年(1876)刊、釋顯承集・釋儀潤校『叅學知津』2巻首1巻附地輿名目について、現行の刊本はすべて清・道光7年(1827)頃の重刻本であり、二分冊の線装本である⁽⁷⁾。一冊目には『叅學知津』巻首、『叅學知津』巻上が収められ、二冊目には、『叅學知津』巻下、附録としての『地輿名目』が収められる。ただし、『叅學知津』の部分は1葉9行21字、『地輿名目』の部分は1葉10行20字であるから、もともと『叅學知津』と『地輿名目』は別々の版であったことがわかり、『叅學知津』二冊目は『叅學知津』巻下と『地輿名目』を合冊して1つに綴じているので『地輿名目』の糸綴じされた行には判読不能な箇所がみえている。

まず『叅學知津』内にみえる編集・刊行者等

の記事を抽出し整理すれば以下の通り。

- ①『叅學知津』巻首、表紙裏 内題
月輪山開化寺^{注1} 前任持如海集
瓶窰鎮^{注2} 真寂寺苾芻^{注3} 源洪刊
叅學知津
附地輿名目

光緒二年(1876) 歲在丙子春正月開雕

注1. 月輪山開化寺…杭州市、六和塔が建つ。

注2. 瓶窰鎮…浙江省杭州市余杭区。徑山寺(禪宗五山第一位)に近い。

注3. 苾芻…物への執着心の無い僧・尼を風になびく草にたとえて苾芻・苾芻尼という。

- ②『叅學知津』巻首、表紙裏 内題裏
蓮幢弟子曹文昭敬題

- ③『叅學知津』巻首、叅學知津序、第2葉A—3葉B

道光丁亥(1827) 九秋二十六日、六十賤降之辰、仁和菟園老人、芝塘沈起潛^{注1}、書於了生座右。

注1. 沈起潛…清の人、菟園は号。著書『菟園雜說』あり。

- ④『叅學知津』巻首、叅學知津題語、第3葉B—5葉A

道光七年(1827) 九月日、古杭瓶窰真寂寺、後學儀潤源洪和南謹識。

- ⑤『叅學知津』巻首、自序、第5葉B—6葉A
大清道光六年(1826) 歲次丙戌、解制後三日、一微頭陀顯承、書於敝虎室之右軒。

- ⑥『叅學知津』巻上、第1葉A
之江開化寺前任顯承集
瓶窰鎮真寂寺苾芻儀潤校

- ⑦『叅學知津』巻下、第1葉A
之江開化寺前任顯承集
瓶窰鎮真寂寺苾芻儀潤校

- ⑧『叅學知津』巻下、第62葉A—B
捐刻芳名謹登於左

- ⑨芳名

大清光緒二年(1876) 武林比丘 雲峯・永性・慧照 同募敬刻重鐫

謹將喜助芳名開列於後

⑩『地輿名目（九省）』第1葉

清古杭真寂寺苾芻儀潤輯錄

⑪『地輿名目』第18葉B, 終

浙紹山邑福勝菴, 釋源洪^{注1}, 諱儀潤捐

洋十圓^{注2}刻此一卷, 計字九千五百叅

注1. 釋源洪…源洪は法名, 儀潤は諱。

注2. 洋十圓…当時流通していた洋銀のことを指す。

以上の記事から、『叅學知津』は、もともと之江（浙江）開化寺前住持の顯承が編集し、瓶窰鎮真寂寺の僧儀潤が校定したことが知られる（⑥, ⑦）。ただし僧源洪の諱が儀潤であるから、法名を用いて僧源洪の校定と称すべきなのであろう（④, ⑪）。道光六年（1826）の僧顯承の「自序」、道光七年（1827）の沈起潛の「序」、同じく道光七年の僧源洪の「題語」、があるから、道光七年頃の刊行が判明する（③, ④, ⑤）。なお「月輪山開化寺前住持如海集」については、「如海顯承」をいう（①）。その後、およそ半世紀を経て『叅學知津』は重刻された。光緒2年（1876）歳在丙子春正月の開雕となる（①）。重刻には、杭州の僧侶、雲峯・永性・慧照が資金を募り尽力したことが知られる（⑨）。この間、アヘン戦争や太平天国の乱があり、巡礼をめぐる交通等の環境は厳しいものとなる。道光年間の初刊に関しては、僧の源洪らの働きかけで杭州・寧波・紹興の僧尼、居士（優婆塞・優婆夷）、寺院・庵、士大夫らが洋銀1元から多くは22元の資金を醸出し、合計77元の洋銀を元手に杭州の裏西湖瑪瑙寺經房にて刊刻された（『叅學知津』巻下「捐刻芳名謹登於左」）。その後の光緒年間の重刊に際しては、杭州の僧侶、雲峯・永性・慧照の3名が尽力して、71名の僧尼が銅錢6～700文から洋銀1元を出し合ったことが記される（『叅學知津』巻下「謹將喜助芳名開列於後」）。

次に内容について、路程書、商業書、百科全書との関わりから述べたい。『叅學知津』発刊の主旨は、僧侶の修行を目的とする「進香」「掛

塔」という全国的行脚に関する路程、訓戒、心得、知識を明示し共有することにある。とりわけ以下に掲げる「朝山十要」（『叅學知津』巻首）はその核心となる。先に述べたように1世紀も遡る Reginald Joonston 氏の研究『中国の仏教徒』にその記事が紹介され、「朝山十要」の抄訳も掲げられていた。ただし、この抄訳には仏教や禅宗の語彙が的確に認識され、正しく表現されていない憾みもあり、改めて訳出しておきたい（補記参照）。

《朝山十要》

一、朝山、爲叅學^{注1}之指南、叅學廣見聞之世境^{注2}。足出戶庭、卽有憂喜・驚悲・憎愛・順逆^{注3}等境。如昔善財南詢^{注4}、見無厭足王、勝熱婆羅門等。尚起疑惑、況今末法^{注5}、豈能掃除。倘遇斯境、當須如夢、如幻、如影、如響、不可隨境而轉。總期尋求知識。叅訪高明、或時節未至、不能卽遇、當念無量劫中。知識提攜我者、皆諸山菩薩之恩、卽今能遇諸善知識^{注6}、亦當朝禮天下名山、虔敬進香、以求神力冥加、早得開悟。此念爲要。

〔朝山進香は、仏道の修行を究める道しるべとなり、仏道の修行を究めれば世間の道理を知り見聞も広めることができよう。今いる叢林を一步出れば、憂いや喜び、驚きや悲しみ、憎しみや愛しみ、道理に順うことや背くこと等の境遇がおとずれる。むかし善財童子が南詢した際、無厭足王、勝熱婆羅門等（の善知識）にまみえた。それでも疑念が生じ、ましてや今は末法の世、どうして払い除けることができよう。もしこのような境地に陥ったならば、夢や幻や影や響（こだま）のごとく（実体がないのだから）、その境地に身をゆだね逃避してはいけない。すべて善知識を探し訪ねることに期すべし。仏道修行のために高明なる善知識を訪ねようとする場合、機会に恵まれず、遇うことができない、その際は（あせらず）「無量劫」という悠久の中のことを念ずべし。善知識が我と手を携えてくれたときは、すべて諸山の菩薩の恩沢であり、

すぐさま諸々の善知識と遇うことができるであろう。また天下の名山を巡拝し、敬虔に進香を行い、神仏のご加護を求めるとき、早期に悟りが開けるのだ。この心がけが肝要である。]

注1. 叅學…参禅学道の略。参禅して仏道を学ぶ。参集して仏道修行をする。

注2. 世境…世道、道理。

注3. 順逆…道理にしたがうこととそむくこと。正と邪。

注4. 善財南詢…善財童子が文殊菩薩に促され53人の善知識（仏道を正しく導く師）を歴訪して仏道修行の旅に出、悟りを開く物語。《華嚴經》入法界品が説く。無厭足王、勝熱婆羅門も善知識の一人。

注5. 末法…中国仏教では仏滅（周・穆王53年、B.C.949年）後、時間的基軸により段階化して、最初の五百年を正法、次の千年を像法、後の一万年を末法とする。正法時には教・行・証が揃い、像法時には教・行がのこり、末法時には教のみとなる。『叅學知津』がまとめられた清代は末法となる。南北朝時代の学僧、慧思『立誓願文』等参照。なお日本仏教では、正法千年、像法千年、末法一万年となる。

注6. 善知識…知識は心を通わせる友人、仏道を正しく悟りに導く師。後者が本文の善知識のことを指す。

一、朝山、宜正心誠意、感通神靈、一路護佑^{注1}、無有障礙。如有同行以免孤寂、或一或二、須防有病有賊之變、或遇險・遇黑之時、可以互相扶持。須真誠有道人、方可所謂「遠行必假良朋、擇其善者而從之」^{注2}、是為同叅道友。彼此皆稱同叅師而互敬之。若三五成羣^{注3}、縱兇任惡、不能畱住之寺、強行挂搭、不能供養之庵、強索飲食、是流窮面目、非訪道心腸。切不可入此惡習、以招惡名。或遇高明同行、應以師禮事之、或遇殘疾苦人、亦當隨力而照顧之。此念為要。

〔朝山進香は、誠心誠意行えば、神靈に感通し、旅路でも神のご加護があり、さまたげも無く

なる。もし同行者がいれば孤独感もまぎれ、同行者が一人、二人といれば、病氣や賊に襲われた際、道が険しい時、夜の暗闇など、相互に助け合うことができる。偽りのない誠の有道者は、まさに所謂「遠行ニハ必ズ良朋ヲ假リテ、善ナル者ヲ擇ビテ之ニ從フ」べきで、これ共に仏道の修行を究める道友となる。互いに皆が仏道修行を究める師と称して敬え。もし三々五々群れをなして、凶悪な所行をほしいままにし、留まることのできない寺に掛塔を強行し、供養を行わない庵では、飲食を求め強要するならば、この振る舞いは面汚しとなり、心の内に真理を求めることからかけ離れてしまう。切にこの悪習に手を染め悪名をまねかぬよう。高明な同行者に遇った場合、師事するとき礼をもって応対し、身体不遇者に遇った場合も、きちんと顧みなければいけない。この心がけが肝要である。]

注1. 護佑…守り助ける、神のご加護。

注2. 遠行必假良朋、擇其善者而從之…唐代の禅僧、鴻山靈祐（771-853）『鴻山警策』に「遠行要假良朋、數數清於耳目、住止必須擇伴、時時聞於未聞。故云生我者父母、成我者朋友。」とみえる。

注3. 三五成羣…三々五々群れをなす、悪だくみをする。

一、朝山、先問明行道之處、即當具決定信心、方能發堅固行願。或先至某山、次及某山、若不預立章程、隨人脚轉、朝東暮西、散意雲水、非獨有負初心、而品亦下矣。或中道聞有真善知識住處、察其虛實、若果真者、同往亦可。即規約嚴密、亦當依止。自思、我為法來、正宜如此。即彼稍有瑕疵、亦弗相詆。此念為要。〔朝山進香は、まず仏道修行する場所を調べて明らかにし、仏を信奉する心をしっかりと決め、そこではじめて堅固な悟りを求める心を起こすことができる。あるいはまず某山に行き、次には某山へと、もし予めその規則を決めておかず、自己の意志も持たず、ただや

みくもにふらふらと歩き回る。(仏道の修行を究め悟りを開くという) 初心に背くばかりでなく、これこそ品性が劣るといふものだ。あるいは道中で真の善知識の住処を聞いた場合は、その人物の虚実を確かめ、果たして真の善知識であれば、ともに行くがよい。規律を厳密にして、その師のもとで仏道の指導を仰ぐべきである。我は仏法のために来たのだと言い聞かせ、師にいささか欠点があったとしても譏ってはいけない。この心がけが肝要である。]

一、朝山、不計歲月、隨路爲家、逍遙度日、自暢心懷、道念堅固、拋却利名。若遇巨匠、桶底自脱^{注1}、行止久速、當隨時宜。若眞大善知識、宜常親近。操忍辱^{注2}之心、發苦行之願、不擇飲食、不辭澹泊。縱遇大難、亦所不辭、自思皆爲前生因地^{注3}有虧、以致今生受報若此。正當見賢思齊^{注4}、見不善如探湯^{注5}。此念爲要。

[朝山進香は、歳月を決めずに道中を我が家とみなし、日々ぶらぶらと歩き、心をゆったりとし、仏道への思いは堅固に持ち、私利や名声を捨て去れ。もし巨匠に会い、解脱していれば、行って長く留まるか速やかに去るかは、その場の状況に従え。もし真の大善知識であれば、常に親しく近づき、忍辱の心を操り、苦行へ立ち向かう心を起こし、飲食も選り好みせず、料理が澹泊であっても辞してはならない。たとえ大難に遇おうとも辞さず、みな前世の修行中の段階で義に背いたため、現世に至りその報いが生じていると自問せよ。まさに賢人を見ればその人のようになりたいと思い、不善を見ればすみやかに退けるべし。この心がけが肝要である。]

注1. 桶底自脱…「桶底脱」、坐したまま往生すること。禪宗で解脱を喩えていう。

注2. 忍辱…六波羅蜜の一つ。迫害や苦しみに耐え忍び、恨みの心をおこさず、動じないこと。

注3. 因地…仏道修行中の階梯の位。因位ともいう。

注4. 見賢思齊…『論語』里人篇「子曰、見賢思齊焉、見不賢而内自省也。」

注5. 見不善如探湯…『論語』季氏篇「子曰、善如不及、見不善如探湯。吾見其人矣、吾聞其語矣。隱居以求其志、行義以達其道。吾聞其語矣、未見其人也。」

一、朝山、原爲求道而行苦行。世間那有天生彌勒。自在釋迦所謂不是一番寒徹骨、怎得梅花觸鼻香^{注1}。須發眞精進、眞勇猛。期了生死大事、如救頭然、思念知識、如禱醫王、禮拜高明、如見師長等。廣如《華嚴經》入法界品、德生童子、有德童女、告善財所說。或語言不同、土音有異、實難領會、可求當時數數審問、或能書者、即記錄之以便記憶。此念爲要。

[朝山進香は、がんらい求道のために苦行をおこなうものである。世間ではどうして天に彌勒が生じることがあろうか。自ずとお釈迦様がいて、いわゆる「(冬)寒さが一度骨身にしみなければ、どうして(春)梅花の香りを鼻で嗅ぐことができようか」ということだ。すべからく真の精進、真の勇猛を發揮することだ。生死という大事を期するには、危急を救うがごとく、善知識を思い慕うには、医王に祈るがごとく、学識高明な者に拝礼するには、師長にまみえるがごとくし、《華嚴經》入法界品の中で德生童子と有德童女が善財童子に言ったようにせよ。行く先々の言語は同じでなく、土着の音も異なり、了解しがたく、その時々何度でも丁寧質問し、書をよくする者であれば、記憶の便のために記録を取れ。この心がけが肝要である。]

注1. 不是一番寒徹骨、怎得梅花觸鼻香…『五灯会元』卷20、安吉州道場正堂明辯禪師。このほか禅僧の語録に多数みえる。

一、朝山、有僧俗之別。俗人進香、盤費充足、易尋安寓。僧道叅訪、盤費淡薄、祇可挂單。

凡挂単時，發哀求心，先壞慚愧。若道氣相留，當生慶幸。或無緣止単，休生瞋恨，或黑或雨，或路遙，和顏軟語，求伊慈悲。若實不留，即問伊何處可宿。亦須忍耐，而投他處，切不可怒容忿語。動伊主人之念，而損自德。當以般若空，觀而自安之。此念爲要。

〔朝山進香には、僧侶と俗人との別がある。俗人の進香は旅費が充足して宿も確保しやすい。一方、僧侶の場合は、旅費も少なく行脚僧が寺に止まる「掛単」に頼るしかない。「掛単」の際は、相手の情に訴えて、まず慚愧の心を持って願え。もし仏道の「氣」が留まれば、めでたい結果となる。あるいは「掛単」できない場合、恨みや怒りはやめ、大雨、遠き道のりであっても柔和な顔で穏やかに語り、彼の慈悲を請え。もし実に仏道の「氣」が留まる状況でなければ、どこに宿をとればよいか問え。すべからく忍耐が必要で、他処に投宿することになっても、怒りの表情を浮かべたり、怒りの言葉を発してはいけない。ややもすればこの主人の思いは、自己の徳をも毀損してしまうからだ。まさに般若心経の「空」をもって見て自らを安んじめよ。この心がけが肝要である。〕

一、朝山、遇接衆之所，或變易異常，不能如法。供養十方衆僧，吾輩當隨機宜，莫嫌彼不道氣。所過村墟，或貧苦難施，或不信慳悋，不能得資身之物者，莫談人無供養。若果無可奈何，祇好沿路托鉢。所謂一鉢千家飯，孤身萬里遊^{註1}。此乃佛制芳規，非恥辱也。梵語比丘此云乞士，內乞法以養性，外乞食以養身，是正命食也。即如人至我處，有何道氣供養，返照回思。正當慚愧，願我若得處所，必以挂搭接衆。此念爲要。

〔朝山進香は、大衆と接するのでいつもの状態とは違い、仏道の法が通用しない。十方衆僧を供養する時、我々は適宜行すべきだが、相手に仏道の「氣」が無いのを毛嫌いしてはならない。通りすがりの村里では、貧苦のた

め布施ができないこともあり、欲が深くケチであると思っはいけない。自身を資養するものを得ることができず、(そのことで)他人に供養も無かったことをしゃべってもいけない。もし果たして如何なるものも無ければ、ただ沿道での托鉢をするのみである。いわゆる毎日托鉢しても千家の飯を満たすまでには至らぬが、孤身での托鉢僧は万里でも飢えることはないのだ。これすなわち仏教のきまりに則ったしきたりであり、恥すべきことではない。梵語で比丘は乞士ともいい、内では仏法で心を養い、外では乞食で身を養い、これまさしく命の食である。もし人が我が居所に至らば、どんな仏道の「氣」があって供養するのか、内省し思いをめぐらせよ。まさに慚愧の心を持って自分の住処を得ることを願わば、必ず「掛塔」を許され大衆(だいしゅ)と接することができる。この心がけが肝要である。〕

注1. 一鉢千家飯，孤身萬里遊…『五灯会元』卷2，明州奉化縣布袋和尚「又有偈曰，一鉢千家飯，孤身萬里遊，青目觀人少，問路白雲頭。」。雲水，行脚僧の乞食をする生活を述べたもの。

一、朝山、依《梵網經》第三十七輕冒難遊行戒^{註1}說。雖有是書，更當勤問。蓋處所有興廢之變，道路有通塞之換，即可入者，須知寺廟爲供佛神而建，非爲我來而備。彼之飲食，上奉佛仙，次及住衆，亦非爲我而備。彼既相留，分房而住，分食而餐，實已慈悲。吾輩若嫌其房舍不完，飲食不精，自生煩惱，心不知足。豈不深招貪・瞋^{註2}罪過。應自喜自足，所謂知足之人，雖臥地上，猶爲安樂。昔釋尊尚受馬麥麤供，我今猶美。此念爲要。

〔朝山進香は、《梵網經》第三十七輕冒難遊行戒に經説がある。この經典の文句があるが、更に自問すべきである。諸処にその地の興廢の変化、道路の通行の変化があり、そこに入る場合、寺廟は仏神を供養するために建てら

れ、我々行脚僧が来るのに備えているわけでも無いことを肝に銘じるべきである。我々の飲食も仏神に奉じるためのものであり、その次に寺廟内にいる大衆に及ぶのであり、決して我々行脚僧が来るのに備えているわけでも無い。我々は留まり分房に止住を許され、餐食を分け与えられ、これは実にすでに慈悲なのだ。我々は房舎が整わず、飲食も粗末であることを毛嫌いしたとき、自らに煩惱が生じ、心足るを知らざる状態となる。どうして貪欲・瞋恚の罪悪を深く招き入れないことがあるのか。自ら足るを喜ぶ、いわゆる足るを知る人は、地に伏しても安楽でいられる。むかし釈尊が馬麥など粗末なものを食したというが、今は美味しいものばかりだ。この心がけが肝要である。]

注1. 《梵網經》第三十七輕冒難遊行戒…『梵網經』については、船山徹『アジア仏教の生活規則 梵網經』臨川書店、2017年に詳しい。

注2. 貪・瞋…貪（自己の好きなものを求める。貪欲）・瞋（自己の嫌いなものを嫌悪する。瞋恚）・痴（物事の道理に暗く無知。愚痴）で人間の三つの悪徳。三毒ともいう。

一、朝山、凡僧道所住之處、皆同名山。故頭門皆稱山門。或名山大刹、或庵觀院廟、凡有宿食之處、不可分彼分此。要深懷恭敬、一同作禮。若稍怠慢、難感格矣。如課誦、坐香、出坡、臨齋等事、槩遵常住規約、隨衆而行。切不可謂行脚辛苦、避懶偷安。此念爲要。

〔朝山進香は、すべてが僧道が住する場であり、名山と同様である。それ故、頭門を山門と称するのだ。名山大刹、庵觀院廟も宿食の場所を設けており、誰彼と分け隔ても無い。必ず恭敬の念を持ち、同じように礼を行え。もし、やや怠慢な所作をすれば、神仏の感応も難しくなるだろう。課誦^{注1}・坐香^{注2}・出坡^{注3}・臨齋^{注4}等の事は、常住規約を遵守し、大衆（だいしゅ）にしたがって行え。切に行

脚の辛苦を口実にして日課や作業を断る言い訳をしてはならない。安楽を貪り怠惰になることを避けよ。この心がけが肝要である。]

注1. 課誦…早課・晩課に經文を誦する。

注2. 坐香…坐して焼香する。

注3. 出坡…寺院での普請、畑等の労働作業。

注4. 臨齋…お齋（とき）に臨む。

一、朝山、須行止自重、保守戒體、無稍放逸。宜直心正念、方不爲聲色所惑。即美景滿前、將愛心先須制定、無妄貪著。或經書字畫等、或金玉奇珍等、總是壞人心術之物、世間所重。我有尚然應捨。何況物屬他人。稍涉苟且、非但破戒汚名、兼斷後人之路。是故於他物中、一草一葉、不與不取、況奇珍耶。此念尤爲切要。

〔朝山進香は、行動を自重し、戒律を守り、ややも怠惰な振る舞いをしないよう。心を正して念ずれば音楽や女色に惑わされることもない。美しい景色が面前に広がり、愛でる心をまず定め、みだりに貪り執着することの無いようにせよ。あるいは書画や金玉や珍奇等の物は、すべて人の心を壊す物として世間でも重く受け止められている。我々は当然捨て去るべき物であり、ましてや他人の所有する物をどうして物色できようか。かりそめにもただ破戒の汚名だけでなく、その上後人の路を閉ざしてしまうのだ。この故に他人の物からは、一草一葉とて盗むことは許されず、ましてや珍奇な物などなおさらである。この心がけが肝要である。]

如上の「朝山十要」をみると《華嚴經》の世界観が色濃く投影されていることがわかる。朝山進香を行う雲水、行脚僧の心の内や所作に細かく訓戒を与えている。この「朝山十要」を含めて、『叅學知津』の内容や構成は、宋代頃より形式が整い、明清時代に陸続と刊行されてきた路程書、商業書、日用百科全書（日用類書）の影響がみられる⁽⁸⁾。

宋元時代から明清時代にかけて庶民や商人、士大夫らの階層を対象にした百科全書が陸續と公刊された。中国では類書と呼ばれ、それを用いた研究の先駆者である仁井田陸氏は日用百科全書と称した。その後仁井田氏の研究を引き継いだ酒井忠夫氏は、日用類書として研究成果を発表していった。斯波義信氏は、中華帝国の後半期、宋元明清時代になると士農工商の相互間の壁は大きく崩れ、社会階層間の流動・周流といった社会移動現象がつづいたといわれる⁽⁹⁾。こうした社会現象を背景に、科挙受験生の教養の手引き、旅行の心得、書翰の雛型、契約文書式、訴状の文章用例、仏教・道教の儀礼、医業関連、農業方式、などの日常の実用情報を扱った多種多様な百科全書がまとめられた。なかでも各地を移動する商人たちの諸規範をまとめたものは、寺田隆信氏の研究において商業書として括られた。同時にこの商業書は、交通路と里程を記し、各地の特産物も付記されるので路程書の内容も併せ持つ。商業書、路程書の範疇にはいるテキストは、たとえば明・黃汴撰『一統路程圖記』、明・陶承慶『商程一覽』、明・壯遊子『水陸路程』、明・程春宇『士商類要』、明・李晉徳（上層）／黃汴（下層）『客商一覽醒迷天下水陸路程』、清・檐漪子『士商要覽』、清・崔亭子『路程要覽』、清・陳舟士『天下路程』、清・頼盛遠『示我周行』、清・吳中孚『商賈便覽』などが挙げられる。一方、日用百科全書を具体的に幾つか挙げれば、宋元時代には『新編群書類要事林廣記』『居家必用事類全集』などがあり、明清時代になると数多くの日用百科全書がみられ、代表的なのは明刊『新刻天下四民便覽三台萬用正宗』であり、その内容も商旅門・律令門・算法門・僧道門・医学門・農桑門等、多彩である。

さて、『叅學知津』『朝山十要』であるが、明・程春宇『士商類要』の「為客十要」や清・檐漪子『士商要覽』の「士商十要」を参考にしていることがわかる。また『叅學知津』に全国の寺院・道観・聖蹟を含む巡礼地への路程等を56ルー

トに分類して網羅しているのは、叙上の商業書、路程書を下敷きにしていることは疑問の余地はないだろう。さらに『叅學知津』には、下記の如く朝山進香の際、毎月暴風が起こる日の天候に注意を払うよう指摘がある。

附録 逐月暴風日期。水路，固宜提防陸路，亦須謹慎。如在本日不起，前後三日之中，準有應驗毋得忽略。

正月初九日玉皇暴	廿九日龍神會暴
二月初七日春期暴	十九日觀音暴
二十九日龍神朝上帝暴	
三月初三日元帝暴	初七日閻王暴
十五日眞君暴	廿三日天妃暴
二十八日諸神朝上帝暴	
四月初一日白龍暴	初八日太子暴
二十三日太保暴	廿五日龍王暴
五月初五日屈原暴	十三日武帝暴
二十一日龍母暴	
六月十三日彭祖暴	廿四日雷公暴【最烈】
七月初八日神煞暴	
八月十四日伽藍暴	廿一日龍神大會
九月初九日重陽暴	廿七日冷風暴【極凶】
十月初五朔日神暴	二十日東嶽朝天
十一月【十四】日水仙暴	廿九日西嶽朝天
十二月【初八】日臘八暴	廿四日掃塵暴

又月逢箕壁翼軫四宿之日，主有風雨，行者擇之。如不得已，亦宜防之。

附梵網經【第三十七】冒難遊行戒【佛恐叅學人，道力未充，不能一切無礙。故制不許冒難遊行爲戒也。】

これなどは、明刊『新刻天下四民便覽三台萬用正宗』卷21商旅門「占候」、明・程春宇『士商類要』卷2「四時占候風雲」、清・吳中孚『商賈便覽』「神誕風暴日期」を援用していることがわかる。とりわけ、清・周焯撰『琉球國志略』（乾隆24年刊）巻5、山川・海・風信の「暴期」の記事内容と酷似していることを附言しておきたい。

次には民間の清香・蠟燭を扱う業者、源豊潤

燭棧が発刊したガイドブックについて述べたい。

二、『武林進香録』と『武林進香須知』

上海東新橋・源豊潤燭棧刊の杭州巡礼指南書である『武林進香録』は上海図書館に所蔵される。同じく源豊潤燭棧が発刊した杭州巡礼のための必携本『武林進香須知』は、『民間私蔵中国民間信仰民間文化資料彙編』第1輯（台北・博揚文化事業有限公司, 2011年）に収載される。両者に同様の記事も散見される。まず『武林進香須知』の冒頭、「天竺進香」⁽¹⁰⁾の「縁起」があり、その中で「武林進香録」という指南書の存在も記されているので以下に掲出したい。

【原文】

縁起

杭城天竺^{注1} 世稱為靈山活佛。曆年春季, 凡各處善男信女之進香者, 真可稱人山人海踴躍^{注2} 非常。其中鄰近省區之曆年進香者, 均熟諸行程, 不待贅言。或有初次進香者, 不免有人生路不熟^{注3}, 抱有多數缺點^{注4}。本主人^{注5} 有鑒於此, 因殫精^{注6} 竭慮^{注7}, 窮數年之心力, 為便利香客起見^{注8}, 特編一部『武林進香録』, 詳載: 來杭進香者, 如何進香之行程, 如何進香之次序, 如何借廬^{注9}, 如何上棧^{注10}, 如何乘車僱輪・僱船。一切價目^{注11}・章程^{注12}, 務^{注13} 使香客處處^{注14} 便宜, 毫不受虧, 並敘明^{注15} 各廟・各寺・各殿名目, 各寺廟佛祖・神仙之諱號, 共計有幾座寺廟, 均明白表明, 以及遊覽西湖之名勝。採辦^{注16} 物件^{注17} 之名目, 無不詳搜博羅^{注18}, 瞭如指掌^{注19}。實進香之指南, 旅杭之寶筏^{注20} 也。區區之若衷^{注21}, 幸共鑒諸, 是為序。

【訳文】

縁起

杭州城域にある天竺山は巷間、活仏が住む靈山と称されます。毎年春の季節がおとずれると、周辺地域から善男善女の信徒らの巡礼者が、真に人の山、人の海と化して、小躍り

するようにして押し寄せ、尋常この上ない有様です。その中、近隣の省区から毎年巡礼する方であれば、みな等しく巡礼の行程を熟知していることは、贅言を待たないでしょう。或いは始めて巡礼する方であれば、知った人もなく路もよくわからず、許多の物足りない不満をかかえることになります。当店は、このことを深く考え、精一杯の熟慮をかさね、数年の心血を注ぎ、巡礼者の利便を図るために、特に『武林進香録』一冊を編み、杭州にやってくる巡礼者が、どのような巡礼の行程をとったらよいか、巡礼の順序をどのようにしたらよいか、宿を借りるにはどうしたらよいか、(荷物・土産等を)倉庫に保管しておくにはどうしたらよいか、汽車や輪や船に乗るにはどうしたらよいか、についてのノウハウを詳細に記載いたしました。一切の値段や規則についても、必ず巡礼者のあらゆる場面の便宜を図り、少しも物足りなさを感じないようにし、すべての各廟・各殿の名称、各寺廟に祀られている仏祖・神仙の諱や号を明確に叙述し、幾座の寺廟があるのかを数え、均しく明確な表示をし、西湖を遊覧する際の名勝古跡についても同様にいたしました。品物を購入するための品名にしても、詳細をきわめました。ひろく捜し集め、見やすく分かりやすいものとなりました。実に巡礼の指南書であり、杭州を旅する人々にとり、仏のみちびきになる宝の筏となることでしょう。ささやかながら、あわせてこの冊子をご覧になることを願い、ここに序文といたします。

注1. 天竺…杭州の天竺山を指す。上天竺寺、中天竺寺、下天竺寺の三天竺寺があり、就中、上天竺寺と上天竺寺観音の信仰が進香の中心となる。今日まで天竺進香がつづく。末尾註(1)拙稿「伝統中国の巡礼と天竺進香—宋代より現代に至る杭州・上天竺観音信仰—」, 同「伝統中国における朝山進香—研究の現状と課題—」参照。

注2. 踴躍…踊は踊に同じ。踊り上がること。

- 注3. 人生路不熟…知った人もなく路もよくわからない。
- 注4. 缺點…物たらぬ点。
- 注5. 本主人…この巡礼冊子を作成した清香・蠟燭を扱う事業者、源豊潤燭棧を指す。当店、弊社、私共の意。
- 注6. 殫精…精力のあるかぎりを尽くす。
- 注7. 竭慮…考慮をつくす。
- 注8. 起見…「為…起見」という形で用いられ、…の見地から、…の目的で、…するために。
- 注9. 借廡…廡は寓に同じ。宿、宿る。
- 注10. 上棧…倉庫に入れる。倉庫に保管する。「棧」は「棧房」「客棧」ともいい、倉庫・運送・宿を営む事業者。
- 注11. 價目…価格、値段。
- 注12. 章程…組織や団体の規則、規定。
- 注13. 務…必ず、きつと。
- 注14. 處處…いたるところ。
- 注15. 敘明…明瞭に書きのべる。
- 注16. 採辦…「採購」「採売」に同じ。買付ける。仕入れる。調達する。
- 注17. 物件…東西に同じ。品物、物。
- 注18. 博羅…「搜羅」で、捜し集める（もとめる）。「博羅」で、ひろく集める。
- 注19. 瞭如指掌…「了如指掌」に同じ。成語。たなごごろを指すように明らかである（よくわかっている）。「指掌」は、見やすく知りやすい喩。
- 注20. 寶筏…仏法に帰依する喩。寶で造った筏に乗るようであるからいう。仏法を、迷いの海を乗り越え、悟りの彼岸に達せしめる貴重ないかだにたとえていう。
- 注21. 區區之若衷…「區區」は、些細な、つまらない意。「區區之衷」または「區區之心」で、つまらない心、とるに足らぬ心。己の心を謙遜するという語。

これを見ると、杭州の巡礼「天竺進香」のための指南書として、まず『武林進香録』が作成され、その後『武林進香須知』が作成されたことがわかる。

まず『武林進香録』の内容構成を列举すると、以下の通り。

- 1) 杭州寺院の古写真：上天竺，中天竺，三天竺，浄寺（浄慈寺），靈隱大殿，靈隱

- 羅漢堂，小和山，玉泉古蹟，龍井
- 2) 杭城（p.1）
 - 3) 城站（p.2）
 - 4) 拱埠（p.2）
 - 5) 西湖形勢（一）（p.3-7）
 - 6) 西湖十景（p.7-10）
 - 7) 西湖物産（p.11-13）
 - 8) 杭地物産（p.14-15）
 - 9) 城站旅館一覽表（p.15-17）
 - 10) 西湖旅館一覽表（p.17-19）
 - 11) 房金價目表（p.19-20）
 - 12) 各廟一覽表（p.20）
 - 13) 進香路由（p.20-23）
 - 14) 杭地車輪船價目表（p.23-24）
 - 15) 上海至杭州輪船（p.24-25）
 - 16) 滬杭甬路滬杭段行車時刻表
- となる。

次に『武林進香須知』の内容構成を掲げると、以下の通り。

- 1) 縁起（p.538-539）
- 2) 特色一，特色二，特色三，特色四（p.540-541）
- 3) 杭州寺院の古写真：上天竺，中天竺，三天竺，浄寺（浄慈寺），靈隱大殿，城隍山全景，雲栖寺，岳廟（p.543-545）
- 4) 〔寺廟伽藍配置図〕：上天竺，中天竺，三天竺，靈隱寺，雲栖，浄寺（浄慈寺），金蓮寺，玉淙（泉）古寺，城隍山，省主城隍廟，五雲山，午潮山，韜光寺，昭慶寺，天真山，玉皇山，龍井寺，老東嶽，拱辰橋張大仙廟，岳廟，湊（法）相寺，虎跑寺，紫雲洞，六和塔（p.546-569）
- 5) 杭城（p.570-571）
- 6) 西湖形勢（一）（p.571-575）
- 7) 西湖十景（p.575-577）
- 8) 西湖物産（p.577-580）
- 9) 各廟一覽表（p.582）
- 10) 進香路由（p.583）
- 11) 杭地車輪船價目表（p.584-585）
- 12) 〔西湖・杭州旅館一覽表〕（p.587-590）

- 13) 杭州實業表：工場，銀行，錢莊證券附，南貨店火腿行茶食店附，藥店參號附，茶行茶葉店茶館，首飾店粉店附，衣店軍服店皮貨店附，綢緞莊，布店，洋廣貨店，煙店香煙公司附，鞋店，文玩，照相館，盆湯，酒館，飯館，菜館，麵館（p.590-596）

ここで『武林進香録』西湖旅館一覽表にみえる当時の清泰第二旅館について注目するならば、その位置を示す路名が「湖濱延齡大馬路」と記されている。『武林進香須知』の旅館一覽にも同じく「西湖延齡路」とみえている。同館は1911年の辛亥革命後、民国2年（1913）に湖濱延齡大馬路に建てられたことがわかる。その後、民国22年（1933）同館は仁和路に移設されたことが知られる⁽¹¹⁾。これが事実であれば、『武林進香録』ならびに『武林進須知』は、辛亥革命後、治安が保たれ周辺の人々の天竺進香が復活して以後、すなわち1910年代から20年代頃に発刊されたことがうかがわれる。

次に『武林進香録』と『武林進香須知』を発刊した業者、源豊潤燭棧について述べておこう。『武林進香須知』には、「上海源豊潤林記 香燭棧分業所 設在杭州西湖邊 滄州旅館」とある。上海の本店と滄州旅館内にある西湖支店が発刊元であることがわかる。源豊潤燭棧については、『武林進香須知』冒頭の「特色一」から「特色四」の記事が手がかりとなろう。以下、如上の『武林進香須知』「縁起」につづき、『武林進香須知』「特色一」から「特色三」までの記事を訳出しておこう。なお「特色四」は、電話等で本店舗の蠟燭を購入すれば、聯票一紙を発行して、現地で品物と交換するというシステム、すなわち香客が遠くから蠟燭等を運ばなくても現地調達できることとなったという内容である。「特色四」には欠字もあり、検討の余地もあるので本稿ではひとまず掲げずにおくこととする。

【原文】

特色一^{注1}

杭城天竺世稱為靈山活佛。各省區城善男信女之來進香者，真可稱人山人海踴躍非常。去年因時局不靖^{注2}，戰事阻隔香客廖廖^{注3}。今春時局平和，諸民安樂，進香者，當較往年尤盛。凡初次進香者，不免有人地生疎〔疏〕^{注4}之概，加以杭地風景滄桑改變^{注5}。本主人為便利香客起見，特編『杭州〔武林〕進香録』一冊〔一冊，詳載〕，窮數年之心力，四面搜羅。凡進香者，何處借寓，何處上棧，如何僱輪・乘車・駕船，一切價目，如何便宜較省，如何進香次第日期，如何進香挨次^{注6}路程，有幾座廟寺，各寺廟名稱，與及大車^{注7}來回時刻表，杭地西湖出品物件，莫不應有盡有。書中，再^{注8}有各大寺院・各名勝山景，統用照相^{注9}拍出^{注10}印入^{注11}，均明明白白。瞭如指掌。實杭城進香破天荒無上之寶筏。凡購本棧香燭滿洋三元^{注12}者，奉送此書一本。

【訳文】

特色一

杭州城域にある天竺山は巷間、活仏が住む靈山と称されます。各省区や杭州城の善男信女の巡礼にやってくる方々は、真に人の山、人の海と化して、小躍りするようにして押し寄せ、その様は尋常この上ないと言えます。去年の時局は不穏にして戦争が巡礼者のまゑに立ちほだかり、寂しく空虚な時がつづきました。今春、時局は平穩を取り戻し、庶民らも安んじたのしみ、巡礼する人々は、例年と較べてみても最もにぎわいをみせました。しかし始めて巡礼する方は、知った顔もおらず土地にも不案内という嘆き、加えて杭州という土地柄のめまぐるしい変化に直面いたします。当店は、巡礼者の利便を図るために、特に『杭州進香録』一冊を編むにあたっては、数年にわたり心血をそそぎ、四方八方さがし集めました。すべて巡礼者が、どこで宿を借りればよいか、(荷物・土産等を)倉庫(あ

るいは旅館)に預けるにはどうしたらよいか、汽車や轎や船に乗るにはどうしたらよいか、一切の値段についての便宜もどのようか、巡礼する場所を少し省くにはどうしたらよいか、期日までの巡礼の路程順序をどのようにしたらよいか、を詳らかに載せております。幾座の廟寺があり、各寺廟の名稱とともに汽車が往復する時刻表、杭州西湖に出品される品物に及ぶまで、あらゆるものが尽く載せられ、書中に載せられていないものは無いと言ってよいほどです。さらに各大寺院や各名勝山景があれば、すべて写真を挿入して印象づけ、均しく明確な表示をし、見やすく分かりやすいものとなりました。実に杭州城域を巡礼するための、今までにない、無上の仏のみちびきになる宝の筏ができました。すべて当店の清香や蠟燭を購入し、洋銀三元を満たす方には、この書一冊を贈呈いたします。

注1. 特色一…この記事と関連して、民国期における新聞『申報』を取り上げてみたい。『申報』1924年3月6日、18324号、13頁所掲「杭州進香」広告には、「上海東新橋源豊潤燭棧謹啓」とあり、「特色一 杭州天竺、每屆春季各省之來進香者、踴躍非常。惟杭城風景、滄桑改變。本主人為便利香客起見、窮數心力、特編『武林進香錄』。凡進香者、何處借座・上棧、如何僱轎・乘船・火車來回、一切價目、挨次進香日期路程、以及各寺廟名稱、有幾座廟寺、莫不應有、盡有書中。再有各大寺院・名勝山景、統用照相拍出印入、明明白白、瞭如指掌。凡購本棧香燭滿洋銀三元者、奉送此書一本。」と『武林進香須知』「特色一」の記事が略出されている〔『申報』1924年3月16日13頁、『申報』1924年3月26日14頁、同様〕。

注2. 去年時局不靖…1916~28年頃の軍閥時代の内戦のことか。

注3. 廖廖…「廖」は、むなししい意。さびしく静かなさま。寂寞。寂寥。空虚。

注4. 人地生疎…「人地生疏」であろう。成語。

「人生地疏」「人地両生」「人地両疏」ともいう。人とも土地ともなじみがうすい。土地不案内。初めてある場所に行き、その土地の人および場所の状況に関して、よくわからなかったり、熟知していない。

注5. 滄桑改變…「滄海桑田」、「滄桑之變」と同意。滄海が變じて桑田となること。世の中のうつりかわりの激しい喩。時勢の大きな変遷をいう。

注6. 挨次…順繰りに、順々に、順次に。

注7. 大車…おもに牛馬が引く大型の荷車、(汽船の)一等機関士、また汽車や汽船の機関士に対する敬称および通称。ここでは汽車を指す。

注8. 再…さらに、もっと、ほかに。

注9. 照相…写真のこと。

注10. 拍出…取り出す。

注11. 印入…印象づける。

注12. 洋三元…洋銀三元のことを指す。当時はメキシコを領有していたスペイン銀が流入。のちに鑄つぶした銀で刻印を捺したコインを鑄造。彭信威『中国貨幣史』上海人民出版社、2015年、鎮目雅人「銀貨の歴史～激動の時代を支えた貨幣～」WINPEC Working Paper Series No.J1504、早稲田大学・現代政治経済研究所、2016年。増井経夫『中国の銀と商人』研文出版、1986年参照。なお平凡社〈東洋文庫〉『清俗紀聞1・2』(1966年)の末尾には洋銀の物価表があり参考となる。

【原文】

特色二^{注1}

本棧自開創以來、出品之燭、早蒙海內外同胞同聲贊美。凡敬神禮佛之燭、尤為潔淨。凡料中^{注2}之柏油^{注3}・燭芯^{注4}・白蠟^{注5}等、均定選頭等^{注6}、誠心監造^{注7}、萬不^{注8}敢摻用^{注9}回淘^{注10}雜油、及欠缺分量、干瀆^{注11}神明。至於重淋堅固、尤為餘事^{注12}。夫神仙佛祖、乃吾輩凡人所同仰保佑^{注13}、若造燭而用牛油・雜油・回淘等油、不但難邀神佑^{注14}、反干天怒、小子既知何敢故犯。或有說、本棧如此鋪張^{注15}、如此耗費、恐難免分量中、或有欠缺之弊。本

主人無以自明，特印誠信券^{注15}，附夾每對燭^{注16}內，用時將此券，或當天，或對神前焚化^{注17}，以期上格^{注18}神明，下明良心。庶免衆議至於花燭^{注19}之異樣。翻新^{注20}・工巧^{注21}絕倫^{注22}，尤為獨一無二^{注23}，非敢自誇也。

【和訳】

特色二

当店が創業してから販売する蠟燭は、つとに海外の同胞たちが声を合わせて賛美しております。およそ敬礼すべき神仏に奉じる蠟燭は、清浄なものでなくてはなりません。材料となる柏油や燭芯や白蠟等は、均しく最上のものを選定し、まごころ込めてその製造過程を監督し、ゆめゆめ廃油を再利用したり、質の悪い油を混じり合わせ、質の良い油の分量を少なくし、神を汚すようなことをしてはなりません。さらに上質の油を注いで丈夫なものを製造することは、余力のなせる技でございます。そもそも神仙や仏様を拝むのは、我々凡人がご利益を得んがためにするのです。もし蠟燭を製造する際、牛油や雑油や廃油を再利用したような質の悪い油を混合したならば、神のご加護をまねきにくくするばかりでなく、かえって天の逆鱗にふれることとなります。わたくしどもは当然わかっておりますので、このようなことをしでかすはずがございません。どなたかは、当店の店構えが大きく、材料も大量に浪費しているため、結局材質の分量中、質の良い油の分量を少なくする弊害がおこるのは免れないだろう、と陰口を言うかもしれません。当店は、これにたいし弁明する術がございません。ただ「誠信券」を印刷し、これを二本セットの蠟燭に挟み入れ、蠟燭を使用する際、この券を用い、天や神前でこの券を燃やし、上では神明を感じさせ、下では良心をはっきりと示すことを期しております。願わくば皆様、装飾された大きな蠟燭を異様であると思われぬことをのぞみます。斬新なデザインで、ほかに比べよ

うも無い品質は、決して誇張しているわけではございません、事実なのです。

注1. 特色二…『申報』1924年3月6日、18324号、13頁所掲「杭州進香」広告（上海東新橋源豐潤燭棧謹啓）を掲げる。「本棧自開創以來、出品之燭，早蒙海內外同胞同聲讚美。凡敬神禮佛之燭，尤為潔淨。凡料中之柏油・燭芯・白蠟等，均定選頭等，誠心監造，萬不敢摻用回洵・雜油，及欠缺分量，干瀆神明。至於重淋堅固，尤為餘事。夫神仙佛祖，乃我輩凡人所同仰保佑。若造燭而用牛油・雜油・回洵等油，不但難邀神佑，反干天怒。小子既知何干故犯為此。特印誠信券，附夾每對燭內，用時將此券，或當天，或對神前焚化，以期上格神明，下明良心。至於花燭之異樣翻新，工巧絕倫，尤為獨一無二，非敢自誇也。」〔『申報』1924年3月16日13頁，『申報』1924年3月26日14頁，同様〕

注2. 料中…ここでは蠟燭を製造するための材料を指すのであろう。

注3. 柏油…烏柏油の簡称。唐代に烏柏木の実から蠟が多く採れることが知られ、主要な植物性灯油の原料となった。明・李時珍『本草綱目』卷35木部・烏柏木によれば、烏柏木の植生は湖北省、四川省東北地域、江西省とされる。烏柏木は和名ナンキンハゼで、「たかとうだい科」に属し、江戸時代に日本にも渡来して蠟を採取するようになった。坂出祥伸「蠟燭考」『文化事象としての中国』関西大学出版部、2002年、同「中国の蠟燭の歴史」『自然と文化』72（特集：蠟燭）、2003年参照。なお宋應星撰・戴内清訳注『天工開物〔東洋文庫130〕』（平凡社、1978年）234頁に蠟燭の品質の上等から下等を述べ、「蠟燭をつくるには、柏の皮油が上等で、蓖麻（ヒマ）の種子、柏混油の一斤ごとに白蠟をまぜて固めたもの、同じく白蠟を入れて固めた諸種の清油、楠木（クスノキ）の種子の油…の順である。北方では広く牛脂を用いるが、これは下等である。」とみえる。同じく238頁に皮油（ナンキンハゼの種子から

とった油)から蠟燭を製造する方法について「皮油で蠟燭をつくる方法は、広信郡(江西省)に始まった。この方法はきれいな柏の種子をとって、種子のまま甑に入れて蒸す。蒸してから、臼にあげて搗く。…皮油で蠟燭をつくるには、苦竹(マダケ)を切って二つに割り、水中で煮てふやかせせる〔そうしないと粘りつく〕。小さな竹のたがであわせて口のところが鉄の杓子で油を流しこめば、すぐ一本ができる。芯を中にさしこみ、やがて固まると、たがをはずし、筒を開いてとり出す。…」と記される。

注4. 白蠟…昆虫のイボタロウムシの分泌物から採取される蠟をいう。蟲白蠟、蟲蠟とも呼ばれる。四川省、雲南省、湖南省の産が優れている。明・李時珍『本草綱目』卷39蟲部・蟲白蠟に、「機曰く」として、明・汪機『本草会編』の文を引き、「蟲白蠟(與蜜蠟之白者不同)、乃小蟲所作也。其蟲食冬青樹汁、久而化為白脂、黏敷樹枝。人謂蟲屎著樹而然、非也。至秋刮取、以水煮熔、濾置冷水中、則凝聚成塊矣。碎之、文理如白石膏而瑩徹。人以和油澆燭、大勝蜜蠟也。[時珍曰]唐宋以前、澆燭・入藥所用白蠟、皆蜜蠟也。此蟲白蠟、則自元以來、人始知之、今則為日用物矣。四川・湖廣・滇南・閩嶺・吳越東南諸郡皆有之、以川・滇・衡・永産者為勝。蠟樹枝葉狀類冬青、四時不凋。云々」とみえる。坂出祥伸氏は唐代までさかのぼる可能性を指摘する。前掲坂出祥伸「蠟燭考」・「中国の蠟燭の歴史」参照。

注5. 頭等…第一等、最上。

注6. 監造…工事・製造を監督する。

注7. 萬不…決して…しない。

注8. 回洵…棄てた廃油を再利用すること。

注9. 摻…「攪」に同じ。混ぜるの意。「摻用」は「摻雜」「攪雜」と同様、質の悪いものをまぜること。

注10. 干瀆…おかしげがす。

注11. 餘事…余力でする仕事。

注12. 保佑…ご利益。

注13. 神佑…天佑、神助。

注14. 鋪張…敷きひろげる。大げさにする。見

栄をはる。ここでは、店構えが大きいこと。

注15. 誠信券…上海源豊潤燭棧「誠信券」のこと。印誠は印章。信券は証書。印誠信券で印章を捺した証書。「誠信券」は本店舗がつくった品質保証書。これを一對の蠟燭に挟み込み、敬神・礼仏に参拝の際、紙銭と同じように香客に燃やさせた。前掲、源豊潤燭棧刊『普陀進香録』14頁に以下の記事がある。「誠信券 修合置無人見存心、自有天知此二語。原係藥舖中修合丸散之口頭禮不謂。本棧香燭與此二語、亦有遙遙相對之勢。蓋藥以濟人、燭以敬神。本主人存誠為本、圖利在後。凡下等回洵・雜油置不邁門、而市售敬神禮佛之燭、製造人均一律誠敬以期上格神。祇因恐空言徒・托貽人讀議。為此敬備誠信券乙紙、附入每對燭內、善男信女持此燭敬神禮佛時、將此券焚火空中、俾神明鑒察。區區此心、幸共鑒諸。(上海源豊潤燭棧誠信券)」。

注16. 對燭…一箱二本入りの蠟燭。

注17. 焚化…寺廟で紙銭をもやす。

注18. 格…「感格」ということ。感じたる、感動させる。すなわち「格神明」で、神と交信する。

注19. 花燭…結婚式等に用いる飾りのある美しい蠟燭。

注20. 翻新…がらっと変わって新しくなる。デザイン等が一新されること。

注21. 工巧…精巧である。

注22. 絶倫…抜群の、並はずれてすぐれた、比較を絶する。

注23. 獨一無二…ただ一つ、唯一無二。

【原文】

特色三^{注1}

大凡香客進寺燒香、人山人海、擁擁擠擠^{注2}、手持香燭、多致手慌脚亂^{注3}、不分次序^{注4}、投奔^{注5}東西、徃徃有前殿而無後殿、有左殿而〔無?〕右殿、加以香煙迷目、及至出寺、屢有不滿意、而抱缺^{注6}不週^{注7}之憾、而購本棧之燭、總包外面寫明、何寺何廟所用、內分名目、何對之燭、是燒大殿、何對之燭、是燒

内殿，何對〔之燭〕，是燒前殿・後殿的，是何〔燒〕神仙佛祖座前所用的。每對燭包外面，均一一注明香客，只需挨次取出隨燒，決不致亂失次序而手慌脚亂也。如是則數千里，或百里前來之香客，豈不乘興，而來滿意而同乎。

【和訳】

特色三

ふつう巡礼者が寺に詣でて焼香するとき、人の山、人の海と化し、おしあいへしあいして、手には清香・蠟燭を持ち、多くは驚きのあまり心も落ち着かず、めぐる順序も判断せず、あちこち他人を頼っていき、往々にして、前殿にあっても後殿になく、左殿にあっても右殿になく、加えて香煙で迷ってしまいます。寺を出るときには、しばしば満足せず、お粗末という憾みをかかえこんでしまうでしょう。しかし当店の蠟燭を購入していただければ、すべて包装の外面に、どの寺廟で使用するのか、包装内には名目を分かれ、何対（つい）の蠟燭か、大殿での焼香では、何対の蠟燭か、内殿での焼香では、何対の蠟燭か、前殿・後殿で焼香するものか、何の神仙佛祖であるのか、座前に用いるものであるのか、をはっきりとプリントしております。対（つい）の蠟燭の包装の外面には、一つ一つ香客に注意書きをほどこし明示してありますので、必要なときに取り出すだけで、焼香の際に紛失したりせず、順序づけてありますので慌てふためいたりしないでしょう。このようであれば、数千里、数百里を遠しとせずお越しになる香客が、どうして興に乗り来訪しながら、満足してお帰りにならないことなどありましようか。

注1. 特色三…『申報』1924年3月6日、18324号、13頁所掲「杭州進香」広告（上海東新橋源豊潤燭棧謹啓）を掲げる。大凡香客進寺焼香，擁擁擠擠，手持香燭，多致手慌脚亂，不分次序，投奔東西，往往有前殿

而無後殿，有左殿而無右殿，加以香烟迷目，及至出寺，屢有不滿意，而抱缺不週之憾，而購本棧之燭，總包外面寫明，何寺何廟所用，內分名目，何對之燭，是燒大殿，何對之燭，是燒內殿，何對〔之燭〕，是燒前殿後殿的，是何神仙佛祖座前所用的。每對燭包外面，均一一註明香客，只需挨次取出隨燒，決不致亂失次序。如是則數千里，或百里前來之香客，豈不乘興，而來滿意而同乎。詳細神仙佛祖諱號與各寺廟之名目，均詳叙，在進香錄。〔『申報』1924年3月16日13頁，『申報』1924年3月26日14頁，同様〕

- 注2. 擁擁擠擠…擁擠を強調することば。群衆がおしあいへしあいする。
- 注3. 手慌脚亂…「手忙脚亂」「手慌脚忙」と同意。成語。驚いて心が落ち着かないさま。なお、「手忙脚亂」は宋代禪の語録、たとえば『大慧普覺禪師語録』『仏果園悟禪師語録』にも見え、宋代以降の仏教典籍にもしばしば散見される。
- 注4. 次序…次第，順序。
- 注5. 投奔…（他人を）頼ってゆく，身を寄せる。
- 注6. 抱缺…缺は缺点（不満）のこと。
- 注7. 不週…「不周」に同じ。行きわたらない，周到でない，お粗末。

以上により、蠟燭や清香を扱う業者、すなわち上海東新橋の源豊潤燭棧本店ならびに滄州旅館内にある西湖支店が発刊元であることが改めて認められる。『武林進香録』ならびに『武林進須知』は天竺進香で杭州を訪れる多くの巡礼者（香客）のために民国初期に源豊潤燭棧が作成したガイドブックであり、販売したのではなく蠟燭や清香を洋銀3元以上購入した香客に贈呈したものであった。その内容は、杭州の寺廟の伽藍配置、荷物預け、宿の手配や料金、交通手段の手配や料金、土産物の店や品々から巡礼ルートにいたるまで微に入り細に入り案内されたものであった。まさに現代の旅行案内、ガイドブックを彷彿とさせる。

最後に杭州の巡礼ルートについて触れておき

たい。民国期になると船や鉄道等の輸送も確立され、それにともない巡礼ルートも整備された。『武林進香録』と『武林進須知』には共に五日間で巡礼するルートがしめされている。

進香路由

第一天進香西路

由城站往西八里，出青波門，至淨慈寺，往西十五里，至上天竺路，過中天竺・叅天竺，往東四里，至靈隱寺，上山叅里，至韜光，上山四里，至北高峯，往北九里，至玉泉寺，往北上山七里，至紫雲洞，回落四里，至岳廟即岳王墳，往東二里，至鳳林寺，往東叅里，至昭慶寺，至城站六里。

第二天進香南路

由城站往南叅里，至城隍山，山上有太歲殿・城隍廟・東嶽廟，往南十二里，至玉皇山，下山二里，至天真山，往南叅里，至六和塔，即開化寺，沿江往南十五里，至五雲山，下山往西五里，至雲栖，回城站，計路城程叅十一里。

第三天進香北路

由城站往北十一里，至地藏殿，上山二里，老和山，即泰林山，下山往東七里，至老東嶽，往北二十四里，至小和山，往西十里，至午潮山，回城站四十六里。

第四天進香中路

由城站往西十二里，至法相寺，往東六里，至龍井，往南五里，至煙霞洞，往東四里，至石屋洞，往南五里，至虎跑寺，回城站十八里。

第五天進香東路

由城站往東念四里，至半山，往南十八里，至拱宸橋・張大仙廟，回城站二十里。如往此路進香不欲到半山者，可乘火車直達拱宸橋，至為便利。

すなわち、天竺進香に関連して巡拝する主立った寺廟名山が下記の如くリスト化され、遠方から来る組織的巡礼団にも計画的に巡拝できるように配慮されている。なお、下天竺寺を三天竺寺とする呼称は、「下」の持つ劣るニュア

ンスを避けたものであり、上天竺寺，中天竺寺，そして三番目の下天竺寺を三天竺寺と言い換えたことがうかがわれる。清朝頃からみられる表記の傾向であろう。

淨慈寺	上天竺	中天竺	三天竺
靈隱寺	韜光	玉泉寺	紫雲洞
岳廟	鳳林寺	昭慶寺	城隍廟
太守殿	東嶽廟	玉皇山	天真山
六和塔	五雲山	雲栖	地藏殿
老和山	老東嶽	小和山	午潮山
法相寺	龍井	煙霞洞	石屋洞
虎跑寺	半山	張大仙	
以下小廟不能細載			

すでに先論⁽¹²⁾で述べたように、明・張岱『陶庵夢憶』巻七西湖香市では、旧暦の「花朝」から「端午」にかけて杭州周辺から香客が集まり、三天竺寺、岳廟、湖心亭、陸宣公祠、昭慶寺等で香市が開かれる様子を伝えている。さらに明末清初の文人、范祖述『杭俗遺風』には、天竺進香の三形態「天竺香市」・「下郷香市」・「三山香市」が説明されている。その説明によれば、「天竺香市」は周辺地域から集まる香客もさまざま、年3回上天竺観音の誕辰・得道・昇天日に参集し、三天竺寺、岳王墳、湖心亭、陸宣公祠、昭慶寺等を回遊し市を立て交易をするという。「下郷香市」の主体は浙江の養蚕農民の男女で、村々で船団を組み、幟を立てやってくる。松木場で船を停泊させ陸路、城内では城隍山各廟、城外では三天竺寺、四大叢林（靈隱・昭慶・聖因・淨慈寺）を巡る。ただ上天竺寺は別格で大蠟燭を供えるという。「三山香市」は三天竺山（寺）、小和山（玄天上帝）、法華山（東嶽大帝）を目指し、郷紳から大家富戸の婦女らが主体となるという。清朝末期から民国期になると天竺進香のルートも様変わりし、民間業者による商業主義の色濃い巡礼ガイドブックが作成されたわけである。

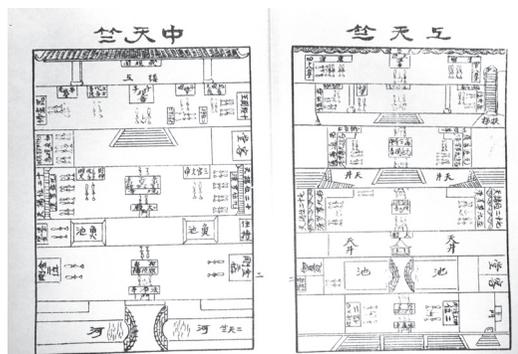


図1 『武林進香須知』「上天竺寺・中天竺寺」

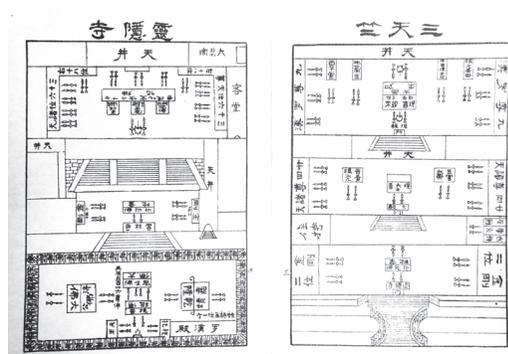


図2 『武林進香須知』「三天竺寺（下天竺寺）・靈隱寺」

結びにかえて

清末から民国期にかけて全く性格の異なる巡礼指南書が生まれた。『叅學知津』は僧侶の手による僧侶の朝山進香のための全国を網羅する指南書であった。見てきた如く民間で陸続と作られた路程書、商業書、日用百科全書を基礎にまとめられた書であった。一方、『武林進香録』および『武林進須知』は、杭州での天竺進香にかかわる業者が一般の巡礼者のために作成したものであった。官撰の書や士大夫の作成したものとは違い、個性豊かである。本報告では、基層社会研究の一環として巡礼ガイドブックを考察した。

<注>

- (1) 朝山進香については、拙稿「伝統中国の巡礼と天竺進香—宋代より現代に至る杭州・上天竺観音信仰—」『巡礼の歴史と現在—四国遍路と世界の巡礼—』岩田書院、2013年、同「伝統中国における朝山進香—研究の現状と課題—」『四国遍路と世界の巡礼』2、愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター、2017年参照。
- (2) 源豊潤燭棧が普陀山の客香のために刊行した『普陀進香録』は、インターネット上の中国古書店（孔夫子旧書網 www.kongfz.con）に表紙を含め写真7点が掲載されていたが、オリジナルの所在は不明である。
- (3) 前掲注（1）、「伝統中国の巡礼と天竺進香—宋代より現代に至る杭州・上天竺観音信仰—」、『伝統中国における朝山進香—研究の現状と課題—」。
- (4) Timothy Brook, *Geographical Sources in Ming-Qing History*, Ann Arbor: Center for Chinese Studies, University of Michigan, 1988.
- (5) Reginald Joonston, *Buddhist China*, London: John Murray, 1913, pp.158-167. 本書において『叅學知津』の紹介がなされているが、原書第7章「巡礼者の道案内」を見ると福建省鼓山（Ku-shan）湧泉寺（Yung-ch'ian）の修行僧によって印刷、刊行された朝四大名山路引（*Chao Ssu Ta-ming Shan Lu-yin*）となっている。また僧侶が他寺へ赴き掛塔する際のやりとり等も紹介されており、今後『叅學知津』の諸版本も調査する必要がある。後考に俟ちたい。なお、レジナルド・ジョンストン（1874-1938）は、中国学者として清朝最後の皇帝たる愛新覺羅溥儀の家庭教師となり、その後英国の租借地・威海衛の行政長官に任じられたことでも知られる。
- (6) Susan Naquin and Chün-Fang Yü, *Pilgrims and Sacred Sites in China*, University of California Press, 1992, p.29.
- (7) 『叅學知津』は、日本の大阪大学附属総合図書館・懐徳堂文庫（貴重書）、京都大学人文科学研究所、関西大学附属図書館・内藤湖南文庫に所蔵される。本稿では大阪大学附属総合図書館・懐徳堂文庫のテキストを底本とした。

- (8) 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』国書刊行会, 2011年。斯波義信「『新刻客商一覽醒迷天下水陸路程』について」(『森三樹三郎博士頌寿東洋学論集』同記念事業会, 1979年)。寺田隆信『山西商人の研究—明代における商人および商業資本—』東洋史研究会, 1972年。水野正明「『新安原板士商類要について』」『東方学』60, 1980年。楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程図引・客商一覽醒迷』(山西人民出版社, 1992年)。山根幸夫「明代の路程書について」『明代史研究』22, 1994年。山根幸夫「楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程図引・客商一覽醒迷』」『東洋学報』75—1・2, 1993年。
- (9) 前掲注(8), 斯波義信「『新刻客商一覽醒迷天下水陸路程』について」。
- (10) 天竺進香については、以下を参照。鈴木智夫「明清時代江浙農民の杭州進香について」『史鏡』13, 1986年。石川重雄「宋代杭州上天竺寺に関する一考察」(『社会文化史学』21, 1985年)。同「宋代勅差住持制小考—高麗寺尚書省牒碑を手がかりに—」『宋代の政治と社会』汲古書院, 1988年。同「宋代祭祀社会と観音信仰—「迎請」をめぐる—」『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院, 1993年。同「巡礼者の道と宿—伝統中国の巡礼」『月刊しにか』第4巻第9号<特集 巡礼の生態学>, 大修館書店, 1993年。同「中国`天竺進香、への誘い—1200年の時空を超えた上天竺観音—」(『第1回四国地域史研究大会 公開シンポジウム・研究集会報告書』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会編, 2009年)。同「宋代上天竺寺与上天竺観音信仰」(何忠礼主編『南宋史及南宋都城臨安研究』下, 人民出版社, 2009年)。同「上天竺観音信仰と天竺進香の現在—伝統中国の巡礼と社会」(『四国遍路と世界の巡礼, その歴史的諸相の解明と国際比較』国際シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学, 2010年)。同「伝統中国の巡礼と天竺進香—宋代より現代に至る杭州・上天竺観音信仰—」『巡礼の歴史と現在—四国遍路と世界の巡礼—』岩田書院, 2013年。徐一智「明代上天竺講寺観音信仰之研究」『法光学壇』7, 2003年。同「明代上天竺講寺所獲得的捐獻之研究」『史匯』7, 2003年。蔡禹龍「清代江南香市簡論—以杭州

西湖香市為中心」『歴史教学』2010-20。王健「明清以来杭州進香史初探—以上天竺為中心」『史林』2012-4。李永斌「南宋時期天竺観音信仰の流伝与影響」『人文雜誌』2015-9。定源(王招国)「有関《天竺靈籤》的考察」(上海師範大学哲学学院敦煌学研究所『經典・儀式與民間信仰國際學術研究会論文集』2014年)。

- (11) 『浙江新聞』の記事「清泰第二旅館, 西湖边的庭院深深」(2016年06月11日来源: 钱江晚报 记者 黄莺 林云龙)。http://zjnews.zjol.com.cn/zjnews/hznews/201606/t20160611_1617380.shtml (2018年9月5日確認)
- (12) 前掲注(8), 石川重雄「中国`天竺進香、への誘い—1200年の時空を超えた上天竺観音—」, 同「上天竺観音信仰と天竺進香の現在—伝統中国の巡礼と社会」。

補記

- * 本文で参照, 援用した辞書類を掲げる。なお本文内では煩雑となるため, 逐一引用書を掲げていないことをお断りしたい。
- ・ 禅学大辞典編纂所(駒澤大学内)『新版禅学大辞典』大修館書店, 1985年。
- ・ 中村元『佛教語大辞典』上巻・下巻・別巻, 東京書籍, 1975年。
- ・ 電子版『望月佛教大辞典』全10巻, 方丈堂出版, 2015年。
- ・ 佐藤法龍『改訂増補 禅語小辞典』長国寺, 1997年。
- ・ 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店, 1980年〔縮写版6刷〕。
- ・ 電子版『漢語大詞典』3.1版, 商務印書館(香港)有限公司, 2007年。
- ・ 愛知大学中日大辞典編纂処『中日大辞典』1978年〔5刷〕。
- ・ 大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』上巻・下巻, 角川書店, 1994年。
- * この小論の一部は, 「清末, 民国期的進香指南書与杭州寺院」(2018年9月23日, 径山寺大慧苑)と題して「第四届東亞文献与文学中的佛教世界國際學術研討会」(浙江工商大学東方語言文化学院, 杭州径山万寿禅寺, 2018年9月21日~23日)にて報告した。
- * 『叅學知津』の研究については, 校正時に石野一

晴氏(慶應大学非常勤講師)によるご示教を得た。石野一晴「清末の「巡礼ガイドブック」『参学知津』から見た僧侶の巡礼」『洞天福地研究』第8号, 2018年9月。石野氏にはパリにおける第二回日仏中国宗教者会議(2017年)の報告もある(『東方宗教』131, 2018年11月)。またMarcus Bingenheimer, “Knowing the Paths of Pilgrimage: The Network of Pilgrimage Routes in Nineteenth-Century China” in *Review of Religion and Chinese Society* 3, 2016, pp.189-222. 参照。特に拙文(2018年9月末脱稿)が触れていなかった Marcus Bingenheimer 氏の論文は、『参学知津』のテキスト内容を詳細に論じており、〈朝山十要〉の翻訳もされている。拙文と校合していただきたい。なお『参学知津』『武林進香録』『武林進香須知』については、後日、全訳注を研究データベースとして公開する予定である。

(客員研究員／東洋文庫研究員)

Pilgrimage Guidebook and Hangzhou Temple in the Late Qing Dynasty, Republican Era

ISHIKAWA Shigeo

When considering the private Chaoshan Jinxiang (Pilgrimage) in Chinese history, which includes Buddhism and Taoism, private books and booklets that remain today have important meaning. Focusing on the private Pilgrimage Guidebook regarding the Chaoshan Jinxiang, it was first published in the second year of the Guangxu Emperor of the Qing dynasty (1876), and cites "Canshen Xuezhì" (edited by Buddhist monk Xiancheng, reviewed by Buddhist monk Yirun).

This book was compiled and edited by Hangzhou monks, covering a total of 56 classified routes to the pilgrimage area including temples, Taoist temples, and sacred sites from North China to South China with 29 winding up and 27 winding down, and Chaoshan Jinxiang, that is, admonition and attitude for pilgrimage are also noted.

Also in the early days of the Republican Era, there are "Wulin Jinxiang Lu" and "Wulin Jinxiang Xuzhi" published by Yuanfengrun Zhuzhan (Xiangzhuzhan Fenfasuo, a branch of Hangzhou West Lake, which entered the Cangzhou inn), a merchant dealing with Incense sticks and candles with headquarters in Dong xin qiao, Shanghai, for pilgrims in Hangzhou West Lake. Similarly there is also "Putuo Jinxiang Lu" published by Yuanfengrun Zhuzhan for Mt. Putuo's Xiangke pilgrims.

"Wulin Jinxiang Lu" and "Wulin Jinxiang Xuzhi" were ascertained to be pilgrimage guidebooks from the Hangzhou West Lake area early in the Republican Era. It includes Tianzhu Jinxiang (pilgrimage with Shang Tianzhu Temple of Kannon as the core), which includes temples, shrines, palace views, and places of historical interest and scenic beauty in the pilgrimage route, organized from the Ming and Qing dynasties as an emergence from the Song dynasty.